平成２７年度　課程博士学位請求論文要旨

古代歌謡引用論

―物語における催馬楽表現史―

立正大学大学院
文学研究科国文学専攻

山田貴文

本論文は、平安物語文学における古代歌謡表現の引用とは何かという問題について取り組む。中心となる対象は、物語に書かれた歌謡表現である。その歌謡のなかで、古代歌謡とされる催馬楽をとりあげるが、催馬楽は、先行研究のなかでさまざまな指摘はなされているが、依然としてその歌の性格および名称についても謎が多く残されている。そのため、催馬楽を研究することにより、催馬楽自体の性格および、物語での表現において従来の解釈が正しかったのか、そこに時代を経た意味付けがあると考えた場合、どのような解釈が可能か、そして登場している場面の読みはどう変わるのかという可能性を提示する必要がある。それには、平安物語文学を指標にして、そこから前後の時代に逸脱することも許容しながら、物語が時代を越えて人々の心に、あくまで言語的経験として生き続ける動態や、それらの作品達を成り立たせる諸条件を歌謡表現もしくは、音楽表現の中から分析する必要があると考える。以下、これまでに得た知見を要約する。

第一章では、物語における音楽表現として、物語と音楽の関係を考察するため、音楽が古代日本でどのような状況下で文化の中に位置づけられているのかという物語作品が書かれる前の環境的背景を追い、そこから唐楽から雅楽へという、古代中国から日本への音楽伝来の流れと音楽受容の様子および受容後の雅楽の国内での歴史を確認する。また、雅楽が物語においてどのように記述表現として物語に影響を与えているのかを『源氏物語』の舞楽場面に焦点を当て確認をおこない、そこからこの舞楽が記述されることで表現として物語に対し登場人物の立場を解説しているのではないかという可能性を提示する。

第二章では、催馬楽の歌謡としての性格を確認するため、歌謡の辿った歴史から歌垣という文化的背景、および踏歌という歌謡が歌われていた儀式および行事について確認をする。そこから古代日本の歌垣と中国伝来の踏歌の融合を確認し、日本の雅楽の成り立ちを確認する。そして、催馬楽が唐楽の曲を持つ歌謡であることを考察する。さらに、催馬楽と場の意識を考察するため、歌謡の行事や宴会での在り方を資料より考察をする。以上の考察から指摘できる催馬楽が、物語上ではどのように登場し引用されるかを具体的に催馬楽と物語で、複数の物語作品に引用される催馬楽「此殿」の記述表現から物語作品での描かれ方を比較し、そこから歌詞を引用することで場面情景を強調し、登場人物達の立場、場面空間における建築物との距離感を実際以上に描くことに催馬楽の歌詞が寄与していることを提示する。

第三章では、催馬楽の注釈書での解釈を比較することで歌謡の性格および歌詞の意味を確認する。現在研究の中心として使用される催馬楽の注釈書および楽譜について解説をおこない、次に催馬楽の伝承の様子を確認するため、催馬楽を伝承する二系統の系図および和琴の系図に繋がる流れを確認する。そして、具体的に催馬楽を律と呂に分け、諸注釈の歌詞を比較し、考察を加えることで催馬楽の歌詞から読み取れる物語を確認する。そして、律と呂の区別が何によってなされているのかという基準もまた模索し中国と日本の

音階の違いからこの区別がなされるようになったのではないかという可能性を指摘する。

第四章では、『源氏物語』以前の催馬楽記載表現を確認するため、『うつほ物語』の催馬楽引用を確認する。『うつほ物語』では、「こはふり」という和歌を催馬楽のリズムでうたう表現が確認でき、ここから、個人個人の声を誰の声か特定し、そこに込められている情報を意識的に強調したい場面で催馬楽が使われていること、さらに催馬楽の選択が情景内で、うたう人物の立ち位置を暗に示していた様子を考察する。次に『枕草子』の催馬楽引用について考察をおこなう。『枕草子』のテクストに催馬楽という語が登場するテクストと登場しないテクストがあるという調査結果を提示し、そこから、『枕草子』の持つテクストの問題に対し、新旧のテクストの違いを催馬楽の語が登場するテクストかどうかで判断できるのではという可能性を提示する。さらに、勅撰史書である『続日本紀』において催馬楽「葛城」と同じ歌が童謡として記載されていることから催馬楽「葛城」のうたの性格を確認する。『続日本紀』と催馬楽「葛城」、さらに『日本霊異記』の歌謡の比較をおこない、『続日本紀』の歌は、人物を意識しての歌であると解釈し、『日本霊異記』の歌は、天皇が天の下を治めることの表相として囃子言葉を意識的に歌った歌であると解釈し、催馬楽「葛城」は、事件を意識せずに歌えるため、より原型の歌に近いことが予想されることを提示し、そこから、催馬楽が歴史事件をその当時の民衆が如何に評価していたかを記録するために歌としてまとめて採録させているのではないかという指摘をおこない、三つの歌謡の解釈の違いはそれぞれの歌の採る立場による違いから来る性格であると結論づける。

第五章では、『源氏物語』における催馬楽引用を確認し、そこでの効果と、物語空間における影響を検証する。『源氏物語』における催馬楽引用は、歌われる場の風景にとけ込むようにただ登場しているのではなく、登場している巻の中での事件について催馬楽を確認することでわかるよう催馬楽の歌詞を利用し、その巻での事件を掘り起こし、表面化させ、その巻の物語の中で問題化する事件として伝えたいことを改めて見せることで巻の中の物語を催馬楽という道具を使ってまとめていることがわかる。また、死の直後の内容が含まれる巻に催馬楽が登場し、催馬楽が登場している巻を経て新たな力を主人公達が得ている可能性も提示する。また、『源氏物語』にとって催馬楽とは、その歌詞に込められた物語を使い、物語における直接語ることが出来ない問題、つまりタブーとなる事象を最も短い形で読者に示す道具としてあるという結論と催馬楽をうたうことで、男女間で和歌による問答が行われるということから新たな恋愛をする場を構成させるという役割があるという結論に到る。また、従来『源氏物語』に引用されていないとされていた催馬楽「浅緑」と催馬楽「大路」が物語中に引用され、その催馬楽が物語上の事件を暗示もしくは、説明していることを指摘する。

第六章では、『源氏物語』以後の催馬楽の記載表現を確認するため、『狭衣

物語』の記載例を確認する。『狭衣物語』で確認される催馬楽の引用表現は、催馬楽の歌名を使い、飛鳥井の女君という名を人物に当てはめることである。人物像を名の由来となった催馬楽の歌詞から連想させ、さらに物語上に浮かび上がらせることで催馬楽の歌詞や語から連想することができる物語を展開させ、その物語を名付けられた人物に背負わせることが『狭衣物語』の表現の新しさであり独自性であるとし、歌詞から連想される「出逢い」と「一時の宿」という二つのイメージを導き出し、同じ催馬楽からの連想であっても違う二つの物語が導き出されるという効果がさらに表現されていることを指摘する。次に『浜松中納言物語』と『夜の寝覚』の催馬楽記載例を確認する。『浜松中納言物語』では、物語展開を想像させる予言歌としての新たな解釈を提示し、あらためて催馬楽という日本の歌詞を持ちつつ唐楽の曲を持つという性格が物語の登場人物達の立場を説明するという従来の解釈を確認する。『夜の寝覚』では、催馬楽の歌詞が記載表現として歌から離れ、殿賞めの語として変化していく様子を確認し、「あげまき」という語から、催馬楽歌名に歌詞から連想される新たな意味づけがなされている様子と催馬楽歌名を付した『源氏物語』の物語展開を想起させる語としての姿を確認する。ここから、物語に登場人物達が受け取る物語上の意味と同時に読み手に対して与えられる情報、予告や予言のような意味があるという解釈が提示でき、この予言として催馬楽がうたわれているという結論を得る。最後に『とりかへばや』の催馬楽記載表現を確認する。『とりかへばや』では、引用する催馬楽の選択が物語文学史の中で固定化していることを確認し、催馬楽が、物語の解説的な役割を強くになっていることを確認する。『とりかへばや』は、男が女になり、女が男になるという男女が交互に入れ替わり物語を進めていくため、場面の主体の立場が男としてか女として描写されているのかという理解が難しいことから、状況説明をする歌として催馬楽が選択され記載されていると結論づける。

以上から催馬楽が、歌詞から歌われた場や歴史から男女の関係においての歌、歌垣を想起させるものとしての性格が強い姿をもつ歌である点、歌垣由来の歌詞を持ち、舞踊をもち、その意識を薄める唐の曲が付けられ、宮中を中心に演奏された中で、物語に表現として利用される点、演奏描写において、男女のコミュニケーションを呼び起こし、そこで男女の駆け引きを呼び起こす歌垣の持っていた場を支配する空間創造装置のような力がある点を持つ歌であることを提示するが、平安物語文学における古代歌謡表現の引用とは何かを催馬楽記載用例から考察した結果、催馬楽は、物語で繰り返し引用されることで歴史性を身に付け、そこから物語を裏から解説する歌として、さらには、物語の流れにおいて予言をおこなう童謡としての役割を担っている歌であることが指摘でき、物語における催馬楽引用は、従来その歌詞から連想される意味だけで考察がなされてきたが、そこに本論文で指摘している童謡のような物語の解説や予言をおこなう歌という視点を組み込むことで物語に新たな解釈をすることが可能であると本論文では位置づけた。